広島大学大学院教育学研究科紀要　第一部　第65号　2016　73－82

「民話」教材と国語教科書を巡る問題の検討

―「民話」の性質に着目して ―

黒　川　麻　実
（2016年10月６日受理）

Analysis of Issues Concerning Folktale Materials and National Language Textbook
― Focusing on properties about “folktales” ―

Mami Kurokawa

Abstract: Until today, many “folktales” were adopted in textbook as the closer text for children. But, there is case that “folktales” have a political power and used by a man of power. For example, “The three years hill” which was used by colonial education. This story was forced to change by Governor-General of Chosen. In detail, to add following sentence; It is a really shameful thing for highly civilized citizens to blindly believe in superstitions. Government-General of Chosen adding to depictions about iconoclasm and Japanization by using falktales. This Therefore, the principal aim of this study was to clear these questions; How “folktales” were used by education and Why “folktales” were used by education. To solve these research question, this study carry out analytical works by following the steps described below; 1) To clarify historical background about “folktales” and to define what literary works were called “folktales”. 2) To consider what problems and argument did “folktales” cause by materializing. In detail, to pick up 1981’s issue about attacking “folktales” in the textbook by main political party. 3) To compare recreated “folktales” with original “folktales”, especially “Kasako-Zizo”, “YU-zuru” and “Berodashi-chonma” witch were attacked. 4) To clear about a real property about “folktales”. The results of my investigation are as follows: 1) “Folktales” were outstanding media because they changed their presentations within a history of literature transition. 2) “Folktales” were regarded as ideology media by main political party because writers were regarded as socialist. 3) “Folktales” were structural media to have many motifs. 4) “Folktales” were tools which are easy to operate by writer and a man of power.

Key words: Folktale, National language education, Ethnology, Children’s literature
キーワード：民話，国語科教育，民俗学，児童文学

１．問題の所在と研究の目的

本論文は，「民話」（昔話・伝説・世間話を含む「民話」の語略，詳細は後述）教材を対象に，国語科教科書やその背景にある文化・政治・思想などの時代状況との関係を省察し，国語教育に「民話」がどのように利用されたのか，またなぜ利用されるに至ったのかを明らかにしようとする研究の一環である。

論者はかねてより，現在国語科教科書に掲載されている「三年峠」を対象に研究を進めてきた[1]。「三年峠」は現在，日韓の国語科教科書に掲載されている「韓国・朝鮮の民話」と言われている[2]。日本では，在日朝鮮人児童文学作家である李錦玉（リクムオギ）の再話絵本が元となって

本論文は，課程博士候補論文を構成する論文の一部として，以下の審査委員により審査を受けた。
審査委員：難波博孝（主任指導教員），
木村博一，竹村信治，松本仁志

いる。韓国では，児童向けの学習漫画から一部抜粋し掲載されている。両者ともに，「三年峠で転んだら三年で死ぬ＝三年は生き続けることができる」といった逆転発想の面白さが強調されており，ユーモアのある「民話」として親しまれている。

しかし，この「民話」は現在に至るまで，様々なメディアに登場し，その中で様々な改作がなされていることが判明した【表１】。例えば，①の池田東離による『都名所車』（1714年）では「三年坂」は，京都の清水坂にあり，大同三年に伝えられた，と明記されている。ところが②の田島泰秀よる『温突夜話（オンドルヤワ）』（1923年）では，「三年坂」のある場所が，朝鮮半島の慶尚道となり，③の『普通学校朝鮮語読本』（1933年）に掲載された「三年고개（コゲ）」では地名が削除されている。また①では，主人公である七十計の禅門が「三年坂」で転んだ際に「三年の内に死ぬであらん」と言った周りの人々に対し，「明日もしらぬいのちなるに先二年は心やすし」と自身で逆転の発想を行っている。しかし②では，迷信を信じる老人に対し，近所の醫者が「一遍転んで三年生きると云ふんでせう，だつたら二遍転べば六年，三年転べば九年…，こんなうまい話が何處の世界にあるものですか。」と知恵を与える内容に変容し，③では少年が逆転発想を行うことで，年長者であるお爺さんを助ける，といった儒教的思想が加わった内容となっている。また③においては，「迷信に惑わされることは，文明人としてこの上なく恥ずかしいことなのです。」といった朝鮮民衆への揶揄に近い教訓めいた記述まで付記されている。

このように「三年峠」が，教科書に掲載され教材となるにあたり，政治状況に合わせた内容の改作がなされていることが判明した。何故，「三年峠」はこのように改作されてしまったのだろうか。後述するが論者は，このことが「三年峠」が「民話」というジャンルに属することと大きく関係していると考えている。

従来の国語科教育研究において，「民話」というジャンルの作品を対象に取り上げた先行研究は，滑川道夫（1981）の「桃太郎」作品を対象にした研究[3]をはじめとして，数多く存在している。しかしながら，個別の「民話」作品の変容やその背景に存在する思想については明らかにされているものの，「民話」一般の性質まで踏み込めてはいない。「民話」の個別作品に留まらず，「民話」というジャンルそのものを包括的に捉え，その本質を解明していかないことには，「民話」が為政者により様々に操作され，教育に利用されていった，その要因を根本から明らかにすることはできないと考える。

そこで本論文では，「民話」というジャンルそのものに焦点を当てその性質を分析していくことで，「民話」が国語教育にどのように利用されたのか，またなぜ利用されるに至ったのかを明らかにする。

２．研究の方法

本論文では，以下の三つの方法から，上記で示した目的に対しアプローチを行う。

まず，「民話」とは何なのかを概括的に把握するため，「民話」と類似する用語を巡る問題を検討し，「民話」の生成を巡る文脈を，児童文学や民俗学との接点を踏まえながら整理する。

次に「民話」作品が教材化されることによって，どのような問題が生じ，論争が巻き起こってきたのかについて検討する。また，その要因について，特に「民話」を巡る論争が過熱化した1980年から1981年にかけて行われた自民党教科書攻撃の対象となった「民話」作品を対象に明らかにしていく。

そして，「民話」に内在する性質を考察し，また「民話」がどのような段階を踏まえ教科書に掲載されるのか，その過程においてどのような操作が行われている

【表１】「三年峠」の概要と変容の様相

	年	国:作者	題名:書籍名	場所・起源	内容
①	1714	日本	「三年坂」	清水坂	**七十計の禅門**ころびしかば往来の人あはれびていとしや**三年の内に死するであらん**といへば此老人につこと笑ひ**明日をもしらぬいのちなるに先二年は心やすし**といへり
		池田東離	都名所車	大同三年	
②	1923	朝鮮半島	「三年坂」	慶尚道	「もう一邊三年坂行つて轉げるんですな」**老人**怒るまいことか、「とんでもない、そんな事をしたら、おれの命はその場でなくなるじやないか」と枕を振り上げて、なぐろうとすればかの**醫者**、「まあ急かずに愚老の云ふことを聞かつしやい、**一邊轉んで三年生きると云ふんでせう、だつたら二邊轉べば六年、三邊轉べば九年**・・・こんなうまい話が何處の世界にあるものですか」
		田島泰秀	温突夜話	昔から傳えられている	
③	1933	朝鮮半島	三年고개	ある峠	「三年峠に行つて、もう一度倒れてください。」「何？儂をからかっているのか。もう一度倒れたら、儂はその場で死んでしまう。」と、**お爺さん**は怒り、木の枕で少年を殴ろうとしました。**少年**は「違います。少し我慢して僕の話をお聞き下さい（中略＝執筆者）皆さんはこのような話を聞いて、世の中に昔から伝わっている話の中には、信じられないものが多いということが分かったでしょう。（中略）**迷信に惑わされることは、文明人としてこの上なく恥ずかしいことなのです。**
		朝鮮総督府	普通学校朝鮮語読本	伝えられている	

のかについて明らかにする。

3.「民話」史の整理

3.1.「民話」とその周辺用語の整理・検討

まず「民話」，そしてその周辺にある類似の用語について整理する。

「民話」という用語は，明治初期には既に，英語やドイツ語の直訳語として早くから登場していた。しかし日本には古くから田舎などにおいて流通していた「ムカシコ」「ムカシガタリ」いう用語が既にあり，昭和初期に柳田國男がそのような状況を鑑みた上で「昔話」という言葉を用い，日本民俗学の学術用語として定着した。その後太平洋戦争が終わり，昭和中期，児童文学者である木下順二，国語教育者である西郷竹彦，益田勝実らによって創られた「民話の会」の活動をきっかけに「民話」という言葉が再び登場した。「民話」という用語は流行の勢いもあり「昔話」に代わって広く使用されていった。

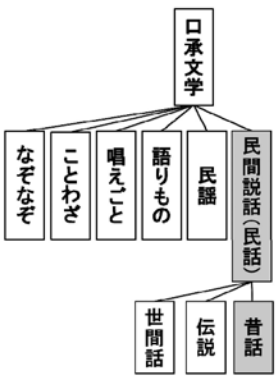
しかしながら，「昔話」と「民話」という用語は様々な混乱と軋轢を生んだ。益田勝実は次のように述べる。

> 外部からは，柳田國男の木下（順二＝論者注）氏の再創造を〈人民の敵〉，伝統の攪乱と見做す批評，〈昔話〉といわず〈民話〉と呼ぶことに対する民俗学者一般の反撥があった。[4]

「人民の敵」といった強い言葉に見られるように，当時の民俗学者は「民話」という言葉に強く反発した。様々な議論の末，現在は**【図１】**のような用語規定に落ち着いている。

しかしながら当時，何故このような用語の混乱が生じてしまったのだろうか。この問題は，単に用語の呼称が異なるということに留まらず，「民話」とは何を指し示すのかといった重要な問題も有している。

そこで，論争の要因を掘り下げていくために，「民話」の生成の歴史と，柳田國男らの民俗学と，木下順二らの児童文学の文脈との接点を明らかにしていく。以降は論文中の用語についても，**【図１】**に則り使用していくが，**【図１】**規定以前，すなわち太平洋戦争以前の「民話」については，「原話」と称することとする。



【図１】 現在の「民話」の用語規定

3.2.「民話」の歴史的変遷[5]

3.2.1.「原話」の登場と発展

「民話」の起源を知ることは，非常に困難であるといわれている。「民話」の原型，すなわち「原話」がある程度，成形し始めたのは，平安時代の末期であるとされている。農民によって行われた語りは，武士の手によって，篝火を囲みながら自分の郷里の「伝説」，「世間話」をする中で，次第に一つの形式をとり「原話」として仕上げられていった。少し時代は遡るが，『日本霊異記』における説話のうちのいくつかは，当時民間に伝承されていた「原話」が素材になったと言われている。他にも『今昔物語集』『宇治拾遺物語』などの多様な文学遺産の中に「原話」があるとされる。

本格的な「原話」が開花したのは，南北朝から室町時代のはじめにかけて『御伽草子』や『お伽噺』が登場してからである。狂言や能の働きによって民衆文化が開花し，特に狂言の一部は，「民話」の原型を今日的遺産として今に繋がっている。そして『御伽草子』と呼ばれる一連の小説の登場により「原話」の仕上げが行われる。一方，これらが「筆による」ものに対し，「語りによる」，『お伽噺』についても触れておきたい。戦国時代の大名の夜の話相手であった「御伽の衆」が，「原話」を整理・潤色し，それまでの素朴な話に新味を加えたり，笑いの要素を加えるようになり『お伽噺』が登場した。『お伽草子』や『お伽噺』などが江戸期に入り，板本絵本により読み物の形をとる。「桃太郎」「猿蟹合戦」「勝勝山」「花咲爺」「舌切雀」をはじめとする「原話」が顔をそろえるのもこの時期である。

3.2.2.「民話」と児童文学，民俗学

当初，日本では「原話」は子ども向けのものではないとされていた。それが，江戸期から次第に「原話」は子ども向けの読み物としての側面を有するようになる。

特にその役割を果たしたのは，巌谷小波である。1892年，巌谷は『お伽草子』や江戸時代の赤本を元にし，さまざまな「原話」の骨格をまとめ，それを自分なりに加筆，修正を加え『日本昔噺』シリーズを刊行した。これらは誰にでもわかりやすい話となって国定国語教科書にも登場する。このような巌谷の「お伽話」「お伽文学」の流れは，小川未明の登場により「童話」と発展し，児童文学が興隆する。

一方，柳田國男は，日本で初めての本格的な「原話」

の研究に着手する。遠野の佐々木喜善から聞いたものを筆録した『遠野物語』（1910）や本格的なタイプインデックスを試みた『日本昔話名彙』（1948）などは，地道な調査研究や収集作業によって，なるべく忠実に聞いたものを書き起こし，分類したものである。

児童文学の流れは，戦中は一旦空白期間を生じさせてしまうが，戦後，厳しい言論統制から解き放たれ，再び勢いを増す。その中で，「原話」を採話するだけでなく，再話するべきだという考え方も巻き起こった。

このような流れの中，木下順二や松谷みよ子らによって描かれた作品は「民話」を再話または創作したものとして，「再話民話」，「創作民話」と呼ばれ「民話」ブームを巻き起こす。

このような流れから，現在もなお，様々な「民話」が，絵本などのマスメディアや，教科書において登場するに至っているのである。

3.3.「民話」史から浮かび上がるもの

「民話」の歴史を振り返ると，多くの「民話」や「昔話」の原型，すなわち「原話」は江戸時代までに生成したことがわかる。

この「原話」に着目し「昔話」研究として日本の固有信仰の究明を目指したのが柳田國男をはじめとする民俗学者である。「昔話」は，日本人の精神世界を明らかにしていく手掛かりとして，昔ながらの形をなるべく保ったものを示している。

一方「民話の会」の指す「民話」は，「世間話」や「伝説」などを含めた民衆の創造のものであり，それらの底に潜む民族の経てきた生活や心の営みを究明するという点に重点が置かれていた。よって，「祖先との協業」により行われるものであるという視点を持ち合わせつつも，従来より伝承されてきた「原話」を，様々なマスメディアに合わせる形で再構成していくことを否定していない。

このような認識の違いが，先に取り上げた用語の論争へと発展していったのである。

次に，このような「民話」作品は，どのように教科書に摂取されていったのか，またその過程においてどのような問題が生じたのか，さらに教材という観点から「民話」の本質に迫っていく。

４．「民話」教材を巡る問題の検討

4.1.「民話」教材とプロパガンダ

教科書にはじめて「民話」が登場したのは，1887年，国定教科書制度が登場する以前の検定制度期に発刊された『尋常小学読本』の「桃太郎」である。ところがこれら「民話」教材は，すでに時代状況に翻弄される形で，政治的な目的で利用されていた。佐古田好一は次のように述べる。

> 「桃太郎」は勧善懲悪，「さるかに」は親の仇討，「花咲爺」は正直というように，「むかしばなし」も，完全に臣民育成の道具にされたのである。[6]

佐古田が述べるように，「民話」教材は仇討思想，侵略思想といったモチーフと結び付けられ，プロパガンダに利用されてきた。

例えば「猿蟹合戦」は第二期国定国語教科書に掲載されていた。しかし，江戸期において親の仇討は義務であるとしていた価値観が，明治期に入り「公権」に帰属させて禁止になり，美談の仇討物語であった「猿蟹合戦」は，第四期国定国語教科書において改変を余儀なくされてしまった[7]。

「桃太郎」も同様に，教科書に掲載される中で変容していった教材である。日清戦争の頃から，桃太郎を皇軍兵士とみなし，鬼退治を戦争であると比喩する表現がいくつかのメディアで登場し，太平洋戦争中の教科書には，超国家主義，軍国主義の性格が強まり，挿絵に日の丸が描かれるなどの改変があった[8]。

そして戦後「桃太郎」や「猿蟹合戦」などの一部の「民話」教材は，軍国主義を高揚させたと判断され，教科書からの追放を余儀なくされている。

4.2.「民話」教材と教科書攻撃

「民話」教材が政治的な目的で利用されたのは，戦前だけに限ったことではない。

1980年から1981年にかけておこなわれた国語科教科書に対する「偏向攻撃」は特に大きな論争を巻き起こした。これは，自民党によって小学校国語科教科書に掲載されている一部の教材に対して，「これは教育にふさわしいのか」という議論が巻き起こったことによる論争である。その皮切りとなった自民党機関誌『自由新報』において，中学校でもなく高校でもなく小学校用の，説明文でも文法教材でもなく文学的教材とさし絵が，偏向のそしりを受けた。この時，要注意作品として槍玉に挙げられた教材には，戦争児童文学と並んで，「再話民話」，「創作民話」があった。例えば「かさこじぞう」，「夕鶴」，「ベロ出しチョンマ」などの作品がある。これらの作品は**【表２】**のように批判された[9]。

具体的には，木下順二の「夕鶴」は，「資本主義社会へのえん曲な皮肉」を表現した作品，岩崎京子による「かさこじぞう」は「ひどく暗い貧乏物語」であり「子

どもたちの心に支配者への憎悪をかき立てよう」とする作品，斎藤隆介の「ベロ出しチョンマ」は「こどもたちの心のなかに「社会変革のエネルギー」を育てていく」作品であると，批判された。

これらの作品が【表２】のように批判される理由として，古田足日は，次のように述べる。

> 民話に根をおろした作品は「かさこじぞう」にしろ「夕鶴」にしろ，また「ベロ出しチョンマ」にしろ民衆の生活に深くはいりこんだところで人間をとらえている。民衆が物質的に貧しかったことや，社会の矛盾に目を向けられるのが自民党はいやなのだろう。[10]

この古田の考えには，「民話」は文字通り民衆によって長い間伝えられてきた話であり，人間の本質的な生き方や歴史を背景に背負っているので，そのことと当時の自民党が行う政治との間には溝があるのだ，という思想が見えている。このように「民話」教材は政治的な場に引き出され，論争の種になってしまったのである。しかしながら，「「民話」は文字通り民衆によって長い間伝えられてきた」という思想についても，安易に受け止めてよいものか，熟考しなければならない。

4.3.「民話」教材に内在する課題の考察

確かに自民党による三作品への批評は，党利党略的な発想から出発しており，虚誕であるといえる。しかしながら，古田の思想の中にある“民衆の生活に深くはいりこんだところで人間をとらえている”という「民話」への素朴な見方にも注意を向けなくてはならない。

先の「民話」史でも取り上げたように，戦後の「民話」への認識は，戦前の認識，特に「昔話」とは大きく異なる。そこで客観的立場から，一見すると正しいように思えるこの認識を改めて検証していきたい。そこで，先程も取り上げた「かさこじぞう」「夕鶴」「ベロ出しチョンマ」の三作品を取り上げ分析を行う。

4.3.1.「かさこじぞう」の検討

「かさこじぞう」は，【表３】に示したように，岩崎京子による絵本が原典となっている教科書教材である。

【表３】「かさこじぞう」の変遷と様相

年代	呼称	内容の詳細
不祥	笠地蔵	『地蔵菩薩霊験譚』や『今昔物語集』巻十七の三十二の地蔵説話
1942	笠長者	岩崎敏夫、柳田國男による『福島県盤城地方昔話』に採録
1956	かさじぞう	大坂書籍の国語科教科書小学二年生用教材に採録
1967	かさこじぞう	岩崎京子作、ポプラ社『むかしむかし絵本3』初出
1976	〃	小学校国語科教科書4社に小学校二年生用教材として採録

「かさこじぞう」の「原話」の成立は，『今昔物語集』以降「狂言」以前と推定され，鎌倉時代が濃厚ではないかと推測されている[11]。地蔵信仰の民間普及に奉仕した当時の僧による説教話とも，民間生産者の中から発生したとも述べられており[12]，民衆の中から登場したか否かについては定かではない。

全国各地に流布した「笠地蔵」であるが，1942年に岩崎敏夫が採集した「笠長者」が『福島県盤城地方昔話』に掲載されている。この「笠長者」を参考に[13]，岩崎京子が「かさこじぞう」として再話・再創造し，絵本を作成した。これが元になり，小学校国語科教科書に掲載されることとなった。なお，岩崎京子の「かさこじぞう」以前にも教科書には「かさじぞう」が掲載されていたようであるが，1976年時点において岩崎の「かさこじぞう」に置き換えられている。

原典とも言える「笠長者」から「かさこじぞう」への再話の様相の比較は【表４】[14]の通りである。ほぼ同場面における記述を抜粋した。

同じ場面でも，様々な記述が付加されていることがわかる。爺の笠が手ぬぐいになる，十二体の地蔵が六体になるなど，一部設定が変更された記述も見受けられる。全体的に説話的というよりは物語的な印象を受ける。岩崎によって付け加えられた「じょいやさ」と

【表２】「夕鶴」，「かさこじぞう」，「ベロ出しチョンマ」に対する自民党の批評

夕鶴	かさこじぞう	ベロ出しチョンマ
木下の「夕づる」は、おんがえしより、カネにつられた”よひょう”が引き起こす悲劇の方に重点を置いているからだろう。これはお互いに愛し合い幸福を願いながらも、カネのために破局を迎えざるを得ない人間の悲哀を強調している。**資本主義社会へのえん曲な皮肉**のつもりなのだろう。（自民党機関誌『自由新報』5/20号）	「かさこじぞう」は日本の民話だが、これはソ連の民話と違い**ひどく暗い貧乏物語だ。**教材の「かさこじぞう」という民話は、しいたげられた民衆の暮らしと心情を描いたものだそうだ。（『自由新報』4/29号）つまり「おさえつけられ、こき使われ、しいたげられ、歴史の表面に出てこない民衆」を発掘することによって、**こどもたちの心に支配者への憎悪をかき立てよう**というわけだろう。（『新・憂うべき教科書の問題』）	斎藤氏は熱心な共産主義者で、選挙のたびに共産党激励のアピールを出している左翼作家である。（中略＝執筆者）この作品は「社会主義的献身を描いたもの」（西本鶏介氏）といわれているが、これによって**こどもたちの心のなかに「社会変革のエネルギー」を育てていく**、というのである。（自民党機関誌『自由新報』5/20号）

【表４】「笠長者」,「かさこじぞう」の同場面の比較

笠長者	翌朝、外の掛声に目を覚まして雨戸をあけてみると、軒下に搗きたての餅がたくさん置いてあるので、驚いて向こうを見ると、笠を被った十二体の地蔵様が、爺の笠を被った地蔵様を先頭にして帰って行かれるところであった。
かさこじぞう	すると、ま夜中ごろ、雪の　中を、「じょいやさ、じょいやさ。」とそりを　引くかけ声が　して　きました。「ばあさま、今ごろ　だれじゃろ。ちょうじゃどんの　わかいしゅが　正月買いもんを　しのこして、今ごろ　ひいて　きたんじゃろうか。」「ほんにのう。」そう　いって、おったら、そりを　引く　かけ声は、ちょうじゃどんのやしきの　方には　行かず、こっちに近づいて　きました。耳を　すまして　よく　聞いて　みると、だれやら声を　合わせて、「六人の　じぞうさ、かさこ　とってかぶせた、じさまの　うちは　どこだ。ばさまの　うちは　どこだ。」と、歌って　きます。じさまが、思わず、「ここだ、ここだ。」と、大声を　出したら、歌声は、ぴったり　止まりました。そして、何やら　おもいものを、ズッサン、ズッサン　とおろす　音が　しました。じいさまと、ばあさまが、おきて　いって、戸を　あけてみると、かさを　かぶった　五人の　じぞうさまと、てぬぐいを　かぶった　じぞうさまが、「じょいやさ、じょいやさ。」と、雪の　中を、からぞりを　引いて　帰って行く　ところでした。のき下には　米の　もち、あわのもちの　たわらが　おいて　ありました。その　ほかにも、みそだる、ごんぼに　だいこんのかます、おかざりの　まつなどが　ありました。じいさまと　ばあさまは、よい　お正月を　むかえる　ことが　できました。

いう擬音語や，歌も登場しており，親しみやすい記述になっている。

4.3.2.「夕鶴」の検討

「夕鶴」は【表5】に示したように，木下順二による戯曲である。これも，日本に古くから伝わる「鶴女房」伝承・説話に端を発している。

書籍として本格的に登場したのは，1923年に鈴木棠三が採集し柳田國男が編纂した『佐渡島物語集』の中に登場した「鶴女房」においてである。これを「原話」に[15]，1949年に木下順二が，戯曲を創作した。その後，1952年に中学校用国語科教科書の教材として登場し，1977年には小学校用国語科教科書にも掲載されている。

「原話」である「鶴女房」から「夕鶴」への変容の様相は【表６】[16]の通りである。これも同じく，ほぼ

【表５】「夕鶴」の変遷の様相

年代	呼称	内容の詳細
不祥	鶴女房	神話伝承以来の系譜をひき、広い分布を持つ異類婚姻譚
1942	鶴女房 鶴の恩返し	鈴木棠三、柳田國男による『佐渡島昔話集』に採録
1949	夕鶴	木下順二作、中央公論新社『婦人公論』が初出。木下は戦時中から構想していた
1952	〃	教育出版社『中学国語上二』に採録
1977	〃	学校図書『小学校国語 4年下』に採録

【表６】「鶴女房」,「夕鶴」の同場面の比較

鶴女房	兄ちゃんは又欲が出て、嫁さんに「もう一度織ってくれ」とたのんだ。それで嫁さんは又織りに取付いた。
夕鶴	よひょうの頭の中は、はなやかな都へのあこがれでいっぱいでした。美しいさくらの下を、美しい車が行き来いているというあの都へ、一度でいいから行ってみたい。そしてたくさんお金をもうけてくるのだー。何をしていても、何を聞いても、よひょうの頭の中はそのことばかりでした。「あの布を織ってくれ。」と、とうとうよひょうが言いだしました「えっ？」と、つうはおどろきました。おどろくはずです。もうあの布は織らないと、固く約そくしたのですから。「どうしても布を織れ！織らないとしょう知しないぞ！」つうの願いはお金でも都でもなく、ただ、よひょうと、二人で楽しく働きながら、いつまでもいつまでもいっしょにくらしていきたい、ということだけだったのです。つうは悲しくて、気が遠くなっていくようなここちがしました。つうは思わず雪の中に走り出ていました。きっとだれか悪い人が、あたしのよひょうを都に連れていくのだ。ーそう思ってつうは、気ちがいのように、あっちこっちへ向かってさけびました。「お願いです！どうぞあたしのよひょうをひっぱっていかないで！お願いです！お願いです！」けれども、答えはなく、雪がますますはげしくふってくるばかり。つうはとうとう、雪の中にたおれてしまいました。

同場面における記述を抜粋した。

まず，「鶴女房」では「兄(あん)ちゃん」，「嫁さん（鶴）」という登場人物の呼称が，「よひょう」，「つう」と木下によって命名された。また，この場面では登場しないが「よひょう」を誘惑する，「そうど」「うんず」という登場人物も存在する。また「原話」と異なり「よひょう」や「つう」の心情表現が豊かに描き出されており「よひょう」は様々な欲を，「つう」は純粋，清浄な愛を求める姿が読み取れる。

4.3.3.「ベロ出しチョンマ」の検討

「ベロ出しチョンマ」は斎藤隆介による，「創作民話」の一種である【表７】。

これは，江戸時代後期に佐倉惣五郎という架空の人物[17]の「義民」談として講談や歌舞伎に伝わっていたものをモデルにしている[18]。

前者二つの「民話」が，「原話」を元に再話・再創造しているのに対し，「ベロ出しチョンマ」はモデルとする人物・講談はあるものの地名や登場人物はすべて創作である。モデルとなった「佐倉義民伝」のあら

【表７】「ベロ出しチョンマ」の変遷の様相

年代	呼称	内容の詳細
江戸後期	佐倉惣五郎義民伝	領主の重税に苦しむ農民のために将軍に直訴をおこなって処刑されたという人物伝
1952	ベロ出しチョンマ	斎藤隆介作、『教育新聞』初出
1980	〃	日本書籍『小学国語 6年下』に採録

すじと，日本書籍『小学国語６年下』に採録されていた「ベロ出しチョンマ」の冒頭と終末部における場面を抜粋した【表８】[19]。

【表８】「佐倉義民伝」あらすじと
「ベロ出しチョンマ」の冒頭と終末部の抜粋

佐倉義民伝	佐倉藩の名主、佐倉惣五郎は、藩主堀田氏の悪政に耐えかね、願書を出す。しかし下げ戻しになってしまったため、惣五郎は将軍への直訴を決行する。願書は受け取られたが、惣五郎は嫁、子ども達共に処刑される。その後、堀田氏は惣五郎の怨念により血筋が断絶する。（発表者作成）
ベロ出しチョンマ	千葉の花和村に、「ベロ出しチョンマ」というおもちゃがある。チョンマは長松がなまったもの。このとんまな人間の名まえである。人形は両手を広げて十の字の形に立っている。そして背中の輪を引くと、まゆ毛が「八」の字に下がって、ベロッと舌を出す。見ればだれでも思わずふき出さずにはいられない。（中略）「ウメーッ、おっかなくねえぞォ、見ろォ、あんちゃんのつらァーッ！」そして、まゆ毛をかたっと「八」の字に下げて、ベロッとベロを出した。竹矢来の外の村人は、泣きながら笑った。笑いながら泣いた。長松はベロを出したまま、やりでつかれて、死んだ。長松親子が殺された刑場のあとには、小さな社が建った。役人がいくらこわしても、いつかまた建っていた。そして、命日に当たる一日にはえん日が立って、「ベロ出しチョンマ」の人形が売られて、親は子供たちに買ってやった。千葉の花和村の木本神社のえん日では、今も「ベロ出しチョンマ」を売っている。

「ベロ出しチョンマ」は「創作民話」である故に，「佐倉義民伝」のあらすじと安易に比較することはできないが，「佐倉義民伝」と異なり，主人公が子どもであることが特徴的である。死を前にしてなお，妹を思いやる長松の豊かな心情が描き出されている。

4.3.4.「原話」と「民話」比較を通した考察

教科書攻撃で取り上げられた作品の「原話」との比較から明らかになったことを考察したい。

これらの作品はいずれも「原話」を再話･再創造し，架空の人物を元に民話風に創作された作品であることがわかる。その際，「原話」のごく限られた記述に対し，作者らが，自らの想像性を持って，より具象化した詳述へと変換している。膨らんだ記述には，作者の思想や政治的立場が入り込むこともあるもあるだろう。これに着眼し，当時の自民党は批判をしたと考えられる。

しかしながら，問題はもっと根深いところにある。これらの作品が，すなわち「民話」という媒体そのものが，“民衆の生活に深くはいりこんだところで人間をとらえている”と広く認識されているという点である。

先にも述べたように，作者は「原話」に様々なものを付加し「民話」を作り上げた。その中には，“民衆の理想の姿”も入れ込まれている。「かさこじぞう」なら貧乏ながら清い心を忘れない民族の姿，「夕鶴」ならば献身的な愛や欲に身を滅ぼす民族の姿，「ベロ出しチョンマ」なら自己犠牲の精神に傾倒する民族の姿，などである。

これを，あたかも過去から引き継がれた日本人の理想の精神であるかのように，再話や再創造の形を取りながら語るところに，「民話」作品の課題があると考える。

以上，「民話」教材を巡る問題を取り上げてきた。「民話」には，時代の移り変わりとともに，皇民，国民，人民など，理想の「民族」像が当てはめられてしまうということを突き止めた。“民話は先祖からの遺産”[20]とも称されているが，「民話」とは作り変えられているということ，そして「民話」に登場する民族の姿は，実は作者によって作り上げられた幻想であるということを確認しておきたい。

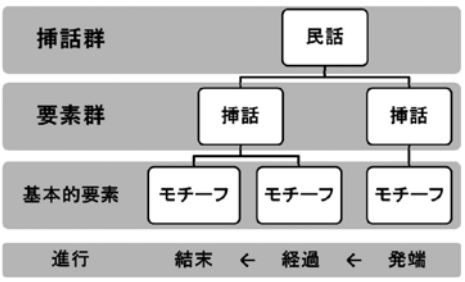
５．「民話」教材の性質の解明

5.1.「民話」の構造性

上記で示した「民話」の歴史や教材を巡る問題史を踏まえ，「民話」教材の本質に迫りたい。

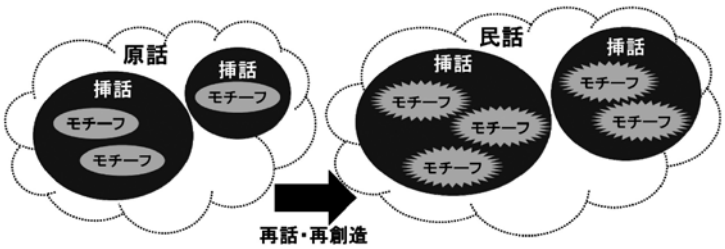
まず，「民話」が構造的性質を有していることに着目したい。「民話」の構造については，アンティ･アールネやスティス・トムソンによって，「民話」のタイプインデックスを作成する際に，検討された。この理論を，ウラジミール・プロップやアラン・ダンダスらが発展的に考察し，「民話」の構造上の特質を発展的に分析した。このような流れを受け，日本においては関敬吾によって【図２】に示したような「民話」の構造図が展開されることが提唱されている[21]。

「民話」は，基本的要素，要素群，挿話群によって成り立っていると考えられている。基本的要素とは，物語の最小単位であり，モチーフと同意義であるとされる。そして，基本的要素がいくつか集まり要素群となる。要素群は挿話とも称され，挿話だけで物語形式



【図２】 民話の構造図

を成す単純形式の「民話」も存在する。多くの「民話」は，要素群である挿話がいくつか集まり形成されるものだとされている。また，昔話の展開の仕方からみると，時，場所，主人公等が示す発端部分と，事件を発展させる経過があり，その後の経過を表す結末部分の三段叙述から形成されている。



【図３】「原話」から「民話」への変容

この構造において可変的な部分は，構造図の最下位に存在する基本的要素部分，すなわち「モチーフ」である。「モチーフ」の増減や，記述内容の変容を行うことで，先に取り上げた作品は，「原話」から膨らんだ記述を付着させるに至ったのである。「モチーフ」をいくら変形させようとも，その上位にある「挿話」にある要素を守っていれば，「民話」として成り立つことができるのである。

5.2.「民話」の可変性

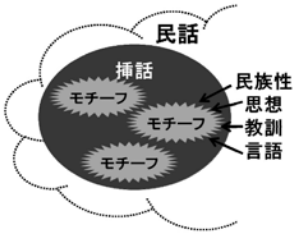
「民話」はその構造性から，「モチーフ」を変形させることで，様々に派生していくテキストであるということが判明した。すなわち一種の“可変的テキスト”であり，変形させることに伝承者や作者は罪悪感や違和感を抱くことがなく，当たり前の行為として受け止められているのである。高橋英夫は，このことに対し次のように述べている。

> 民話には，オリジナル・テキストと呼びうるものは存在しないと思う。より正確に言えば，オリジナル・テキストは現実にわれわれの目に見える形としては存在しえない，と思われる。整備された蒐集法によって細心に書き記された民話であっても，それは伝承者がくりかえし語り続けてきた語りの，ある一回の再現的定着であり，オリジナルとは見せない。[22]

高橋が述べるように，柳田國男らが，なるべく昔ながらの形を保ちつつ蒐集した「原話」でさえ，変化したテキストであると言える。それをさらに，子供むきの平易な表現にあらためたものが児童文学者らによる「再話民話」「創作民話」などである。つまり「原話」や「民話」は可変的なテキストであるということができる。江戸時代以前までに作成された「原話」も，高橋の述べるようにオリジナル・テキスト，すなわち原初性や原型性は変形したものとして扱わなければならない。次世代へと繰り返し語られるうちに，本来的な形は失われ，非本来的な派生物と化してしまっている。

今回，事例として取り上げた「かさこじぞう」をはじめとする「再話民話」は，「原話」に比べ，そのテキスト量が何倍にも増加している。これは，**【図２】**に示した「モチーフ」を変形，増加させ，さらに作者による潤色を加えることによって生じた現象であるといえるだろう**【図３】**。

さらに，変形，増加された「モチーフ」には，作者の意図や願いが自然と入れ込まれ，時に「民族性」「教訓」「思想」「言語」などの要素が充填される**【図４】**。これらの要素は，対象や掲載される媒体によって，次々に入れ替えられていく。こうして現在の私たちがよく目にする絵本や教科書などに登場する「民話」が出来上がっていったのである。そして，そこに無かったはずの／あったはずの「民族性」「教訓」「思想」「言語」などが，あたかも昔から言い伝えられてきたかのように，私達の目には映るのである。



【図４】「民話」に付加される要素

5.3.「民話」の操作性

【図３】や**【図４】**の「モチーフ」には，日本人のアイデンティティが豊富に盛り込まれ，懐古的な魅力を有している。柳田國男らをはじめとする民俗学者が着目した部分であり，このモチーフのみの入った，地の言葉によって語り継がれてきた「原話」を重要視した。それ故に「原話」の中に様々な要素を意識／無意識のうちに充填し，さらに大衆向けの言葉に書き換え「民話」を作り上げた児童文学者らと対峙することになった。このことからも，「民話」は操作性の高いメディアであるということが窺える。

このような性質から，「民話」や「民話」教材は，戦前においては，皇民教育や軍国主義のプロパガンダに利用され，戦後においては，民族主義や民主主義文

学活動の波と相まって“貧困・欲・権力に抗う民族”という言説を付加させられてしまった。

では，どのようにして，これら変容する要素を，「民話」や「民話」教材に付加／削除されるのか。論者は，少なくとも二段階のプロセスがあると考える。【図５】まず，「原話」を基に再話・再創造を行った作者らによって様々な要素が補われる。そして，教科書編修者が，これを原典にさらに教科書という媒体に載せる上で，表記の変換から記述の変換まで，様々なレベルで加工を行う。「原話」が教科書編修者によって直接加工され，教科書教材になることもある。教材化される背景には，濃淡の度合いこそあるが，為政者の影響が窺える。

論者は，児童文学に対し「民話」は「原話」の形を保つべきであるという注文をつけるといったことや，断じて 再創造・再話してはならないということを言いたいのではない。創作活動の自由はいつの時代も保証されるべきである。

しかし，【図５】における点線の部分，すなわち国語科教科書やそれを使用する教育の場においては，十分な注意を払わなくてはならない。

「原話」が「民話」，そして「民話教材」になるという過程において，当初想定していた読み手である“子どもや大人”が“学習者”に変わり，“作家”が“教科書という作者”に置き換えられてしまう。国語科教科書は，その時代の「国民リテラシー」を定着させる強力な「伝達メディア」の一つである[23]が故に，【図５】において次第に付加されていった要素が，教科書を媒介し，大きな力を有してしまう。それが当初の作者らの意図する範疇を越え，本来の教育の目的すらも越えてしまうことになり，これまでに，様々な論争や問題を引き起こしてしまったのである。それでも「民話」教材は，「原話」の持つ構造性や可変性ゆえに，その時々のコンテクストの要請に応じ，姿形を変え，登場し続けるのであろう。

６．本論文の成果，課題および展望

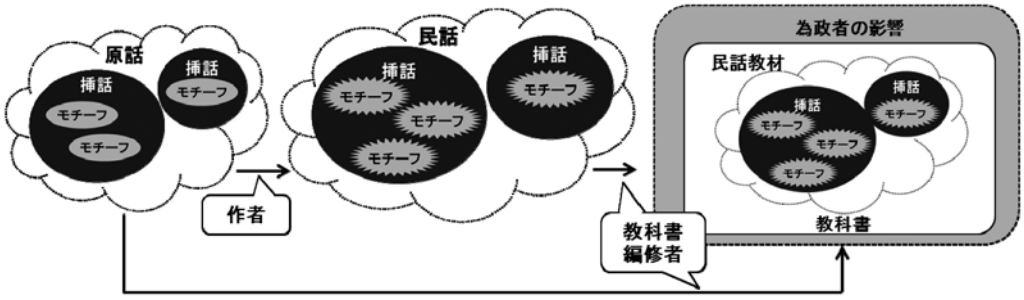
6.1. 本論文の成果

本論文では，「民話」というジャンルの教材に着目し，「民話」の性質の解明に重点を起きつつ，「民話」が国語教育にどのように利用されたのか，またなぜ利用されるに至ったのかの解明を行った。まず，どのように利用されたかについては，「民話」成立の歴史や，「原話」と「民話」教材の比較からの検討を行った。その結果，「民話」の「民」の部分には，時代状況によって，皇民，国民，人民と，理想の「民」像が当てはめられてしまうということを明らかにした。国語教育は，この理想の「民」を表象した「民話」を教材化することにより，理想の「教育」を学習者へと施したのではないかと考えられる。

そして，なぜ利用されるに至ったかについては「民話」の本質を探っていくことで明らかにした。まず「民話」は「モチーフ」の増減を行いやすいという構造を有することが判明した。そこから，「民話」の核となる「原話」には可変性があり，「民族性」「教訓」「思想」「言語」などの要素を付加／削除できるメディアであるということができることが明らかになった。そして，「民話」が国語科教科書という媒体に掲載された際に，「民話」の有する様々な要素が作者や教科書編修者の意図や本来の教育の目的を越えてしまうがために，利用されやすいメディアとして「民話」が存在しているのではないかという結論に至った。

6.2. 本論文の課題と展望

本論文の課題としては，次の通りである。まず，本論文では「民話」の性質の解明に焦点を当てているため，実際に付加／削除された記述と「民族性」「教訓」「思想」「言語」などの要素と，どのように対応しているのか，すべての「民話」教材に同様なことが言えるのか，具体を論じきれなかった点である。これについ



【図５】 教科書教材として「民話」が掲載されるまでの経過

ては，「民話」教材の要素の変容の具体の個別事例研究を引き続き行っていきたいと考えている。

次に，現時点における実際の教育を想定した場面については言及することができなかった点である。2016年2月および3月の中央教育審議会教育課程部会国語ワーキンググループの資料において，国語科で育成するべき資質・能力の三本柱が提示された[24]。その一本である「学びに向かう力，人間性等」の中には，「我が国の言語文化に関心を持ち，言語文化を享受し，生活や社会の中で活用し，継承・発展させようとする態度」[25]がある。小学校では，「昔話や神話・伝承などの読み聞かせを聞く」[26]という内容が位置づけられているが，その「昔話や神話・伝承」は，小学校において文語調で描かれた「原話」そのものを教えるのには無理があるため，おそらく要素の付随した作品が提示されると考えられる。そうなった際，「昔の人のものの見方や感じ方，考え方を知る」ために国語科教育では，様々な思惑や欲望によって作り上げられた「昔話や神話・伝承」を始めとする「民話」をどう扱えばよいのだろうか。また，教室においては，どのような学びを展開していくべきなのか，これについては稿を改め論じていくこととする。

今後は「民話」が民衆の想像力から生じた特殊なメディアであるということも踏まえ，「民話」の周辺にある文脈を整理しつつ，上記の課題に取り組んでいく。

【注】

[1] 黒川麻実（2016）「民話「三年峠」の教材化をめぐる史的考察：植民地朝鮮・日本・韓国の通時的検討を通して」『国語科教育　第七十九集』pp.31-38

[2] 光村図書出版（2015）『国語三下　あおぞら』pp.48-58

[3] 滑川道夫（1981）『桃太郎像の変容』東京書籍

[4] 益田勝実（1972）「創作民話論の瀬ぶみ」『日本児童文学 18(7)』p.36

[5] 木下順二（1960）『日本の民話』毎日新聞社，大川悦男（1966）『日本民話読本』実業之日本社，野村純一編（1984）『昔話と文学　日本昔話研究集成５』名著出版，福田晃編（1984）『昔話の発生と伝播　日本昔話研究集成２』名著出版などの書籍を参考に，本節をまとめるに至った。

[6] 佐古田好一（1961）「提案Ⅱ　教科書の中の民話教材」西郷竹彦編『シリーズ・民話と教育１　国民教育における民話』p.65

[7] 佐藤元紀（2012）「「事実」を語ること：芥川龍之介「猿蟹合戦」」『稿本近代文学 37』pp.34-47

[8] 滑川道夫（1981）「桃太郎像の変容」東京書籍

[9] 自由新報：部落問題研究所（1981）『部落　第33巻第一号』pp.86-94

[10] 古田足日（1981）「自民党の国語科教科書攻撃と児童文学中傷」日本児童文学者協会編『国語科教科書攻撃と児童文学』p.36

[11] 福田隆義（1983）「文学史の中の児童文学『かさじぞう』」文学教育研究集団『文学と教育 (123)』pp.64-70

[12] 斎藤寿始子（1981）「ほんとうの歴史は民話の中に」日本児童文学者協会編『国語科教科書攻撃と児童文学』p.79

[13] 斎藤寿始子（1981）〃 p.82

[14]「笠長者」：柳田國男監修，日本放送協会編（1971）『日本昔話名彙』p.85「かさこじぞう」：学校図書（1977）『小学校　こくご　二年下』pp.52-55

[15] 吉沢和夫（1981）「人間性への郷愁をみごとに描き出す」日本児童文学者協会編『国語科教科書攻撃と児童文学』p.242

[16]「鶴女房」：鈴木棠三（1942）『佐渡島昔話集』pp.64-66「夕鶴」：学校図書（1977）『小学校　こくご　四年下』pp.92-94

[17] これについては諸説あり，「惣五郎」という人物自体は存在しているが，伝承内容などについては記録がないため，本論文においては架空の人物として位置づける。

[18] 小西正保「質の高さをみずから証す斎藤文学」日本児童文学者協会編『国語科教科書攻撃と児童文学』p.213

[19]「ベロ出しチョンマ」：日本書籍（1980）『小学国語六年下』pp.6-15

[20] 岩崎京子（1981）「民話は先祖からの遺産』部落問題研究所『部落　第33巻第一号』pp.39

[21] 崔仁鶴（1976）『韓国昔話の研究：その理論とタイプインデックス』弘文堂，p.108

[22] 高橋英夫（1976）「民話の文体：その成立条件について」『国文学 解釈と教材の研究21(15)』pp.34-41

[23] 府川源一郎（2014）『明治初等国語科教科書と子ども読み物に関する研究：リテラシー形成メディアの教育文化史』ひつじ書房，p.2

[24] 文部科学省中央教育審議会　初等中等教育分科会教育課程部会　第四回配付資料より（2016年２月19日）
http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/068/siryo/__icsFiles/afieldfile/2016/04/01/1369033-2.pdf

[25] 文部科学省中央教育審議会　初等中等教育分科会教育課程部会　第五回配付資料より（2016年３月14日）
http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/068/siryo/__icsFiles/afieldfile/2016/03/31/1369048_04_1.pdf

[26] 〃